



新聞の役割

理事長 森 勉

今年には戦後75年目、廃墟から奇跡の復興を成し遂げた激動の昭和は遠くなり、豊かで平穏な平成は静かに過ぎ去り、新型コロナウイルス・東京オリンピック等先行き不透明な令和が始まりました。昭和22年生まれの団塊世代の私にとって戦後は自分の人生そのものです。私は現役時代、朝日新聞を頑迷固陋に取り続け退官後は一転して読売新聞を購読していましたが、最近スポーツ面とかテレビ番組しか見なくなり妻の薦めで新聞の購入を止めました。毎朝起きて新聞を見る習慣がなくなった外には何の不都合もなく、あるとすれば妻が見るスーパーの安売りの折り込みチラシがなくなっただことくらいです。戦後の主要なメディアは、活字と写真の新聞・雑誌等、音声のラジオ、映像と音声の映画等でした。その後映像と音声のテレビが各家庭で見られるようになり、相撲、野球、プロレス等の中継に国民は熱狂しました。令和の現在はIT化によりテレビにデータ情報が付加され、またそれ以上の機能を持つパソコンやスマホは情報の質・量・速度において他を圧倒していますが、不思議なことに情報速度の最も遅い新聞・

雑誌等が依然として主要なメディアとしての役割を果たしています。

私が陸幕に最初に勤務した昭和60年頃、各部に数台のワープロが導入されました。字の下手な私は私物のワープロを購入し文書を作成し上司の指導を受けると、それまでの手書きの起案文書は原型がなくなるほど赤鉛筆で修正されていたのに、活字には不思議な魔力があるのかほとんど手が加えられなくなりました。新聞・雑誌等が未だに役割を終わらないのは朝の習慣や折り込みのチラシの効能ではなく活字の魔力のお陰かも知れません。活字の魔力を信じるアナログ世代がいなくなり、テレビ・パソコン・スマホ等のデジタル世代になつたときにも新聞・雑誌等がその役割を維持出来るか疑問です。ポストコロナではリモートワーク・テレワーク等の働き方や電子決済等のデジタル革命が加速し、活字の魔力に取り憑かれた団塊世代の私のようなデジタル難民は静かに時の流れに身を任せるしか術はないのでしょうか。私は新聞の購読を止めてからテレビ、パソコン、スマホに接する機会が増え興味を持つようになりました。習慣を変える僅かな勇氣、将来に対する少しばかりの希望があれば実はデジタル難民からの脱出は意外と容易なのかも知れません。しかしながら団塊世代の私としては新聞の活字の魔力を秘かに信じています。